様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２１１２

研究課題名（和文）グローバル観光産業が地域に与える影響：クルーズ観光の分析

研究課題名（英文）The influence of global tourism industries on regional development: an analysis of cruise tourism

研究代表者
フンク　カロリン（Funck, Carolin）

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：７０２７１４００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、都市景観と市民生活への影響を含め、クルーズを巡る議論が活発に行われているドイツと、クルーズ市場が新しく、各地域が競い合ってクルーズを誘致する日本を比較し、クルーズ観光の受け入れ地域への影響を学術的に評価する枠組みを検討した。日本とドイツにおけるクルーズ観光の現状と寄港地における影響圏を解明し，クルーズ利用者が寄港から日帰りツアーで観光を行うことにより都市景観、都市遺産、港と周辺地域の関係にどのような影響を及ぼしているか分析した。グローバル現象であるクルーズ観光は「点」である港からどこまで広がり、面的な影響圏を形成するか，その影響範囲をどのように管理するか，検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術意義は3点あげられる。第①に，今まで注目されなかった，熟観光市場におけるクルーズ観光に注目した。第②に，クルーズ観光の影響を地理学と都市計画学から学祭的に検討して，港と受け入れ地域のガバナンスを検討した。第③に，クルーズ観光の運営管理には国，地域，ローカル（港）の複数のスケールで様々なアクターが絡み合い，その権力関係と協力体制によりクルーズが地域にもたらす影響が異なることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：While cruise tourism is received skeptically worldwide due to its connection to overtourism, environmental and workplace issues and the highly concentrated structure of the industry, it is actively promoted by governments in East Asia as a new and growing sector of the international tourism market in the area. Japan and Germany are both mature and highly developed tourism markets that have seen a rapid increase in cruise tourism lately; they also feature highly differentiated structures of governance across all scales. This research analyzed the influence of cruise tourism on spatial tourism structures in Japan and Germany on the national, regional and local level.

研究分野：人文地理学

キーワード：クルーズ　港ガバナンス　日本　ドイツ　国際観光

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本のインバウンド観光は近年急成長してきたが、その中でもクルーズを利用して日本へ到着する外国人旅行者の増加が目立っていた。また、世界的に伸びているクルーズ市場はアジアで特に急成長し、アジアで提供されているクルーズ回数が 2016 年に前年に比べて 43%成長する見通しであったが、最も人気の高い目的地が日本である（Clia 2016）。

クルーズ観光が目的地に与えている影響について，解釈が分かれていた。クルーズ業界は目的地の経済的利益を強調しているが、クルーズに関する先行研究ではグルーズ市場や業界の問題点を指摘するものも多い。例えば、Rodrigue/Notteboom(2013)はクルーズ産業の集中度と路線戦略における利益追求を指摘した。Caric(2016) はクルーズ観光が急成長市場であり、環境への影響がゴミ排出、排水、空気汚染など複雑であるため、環境への影響を評価する必要性を述べ、評価モデルを提案した。Sun/Feng/Gauri(2014)は中国のクルーズ市場を分析し、受入体制の課題として施設整備と言語環境、または人材育成を上げている。Papathanassis/Beckmann(2011)は 1983 年から 2009 年までの間に発表されたクルーズに関する学術論文 145 枚を整理し、研究がクルーズ需要と経済的･社会的効果に集中し､理論的な研究が少ないことを示した｡また、クルーズ産業の集中度と閉鎖された環境、つまり船の中で行われている観光形態であることから、研究者にとって情報がえにくいことも指摘した。この論文で取り上げられた先行研究を見ると、寄港地の分析は島、特に今までクルーズの最も重要な目的地域であったカリブ海に集中し、先進国に立地する寄港地の調査が少なかった。Hritz/ Cecil(2008)は、大型クルーズ船の増加はクルーズを高級レジャーからマス・ツーリズムへ拡大させ、その結果、利用者の目的地における出費も減ることを強調し、経済効果に疑問を示した。

世界的規模で経営活動をしている各クルーズ会社がアジアの市場に注目し、中国に大型クルーズ船のホームポートを設置したことにより大型クルーズ船が頻繁に日本の各港に立ち寄るようになった。国土交通省もクルーズ寄港が地域経済に貢献することを期待し、寄港施設を揃え、誘致に力を入れるように指導している。しかし、今まで外国人旅行者が少ない地方にクルーズ船が立ち寄り、また、神戸や広島のように観光地として成立している都市でも大型船の寄港が受入体制に負担をかけることが事実である。申請者は 2015 年から広島港を事例にクルーズ利用者の特性と受入体制について研究し、クルーズ寄港を評価する地理学的枠組みを検討してきた。しかし、研究開始当時では国内の研究が少なく、経済効果の報告書に限られているため、英語圏の先行研究で指摘されている課題や、広島港の現地調査で明らかになった観光地域への複雑かつ広域的な影響について明らかにされていなかった。

つまり、研究開始当時のクルーズ観光に関する学術的背景をまとめると、１）英語圏において多側面、多分野からの研究成果はあったが、目的地への影響を総合的に評価する研究が少なかった；２）クルーズ船の大型化はクルーズ観光を高級ニッチ市場からマス・ツーリズムへと展開させたことが指摘されていたが、観光が個人化、多様化してきた熟市場、つまり、日本やヨーロッパのような先進国の目的地にとってそれは何を意義するかという研究がない；３）急成長を示している日本を目地としたクルーズ市場についての研究が少なかった。

２．研究の目的

本研究では、都市景観と市民生活への影響を含め、クルーズを巡る議論が活発に行われているドイツと、クルーズ市場が新しく、各地域が競い合ってクルーズを誘致する日本を比較し、クルーズの影響を学術的に評価する枠組みを作成する。また、寄港地域の利益を最大限に生かし、市民生活と他観光形態との調整を重視する、持続可能なクルーズ観光の姿を探る。

クルーズが様々な視点から研究されてきたが、具体的な効果に集中し、理論的な研究が少ないといえる。そこで本研究は日本とドイツの寄港地を対象に調査を行い、地理学、都市研究、そして観光学の視点からクルーズ船、特に大型船による目的地への影響を分析することを目的とする。その中で特に以下の 3 点に注目する：

(1) 日本とドイツにおけるクルーズ観光の現状と寄港地における影響圏の解明（地理学的視点）グローバルに営業を展開しているクルーズ業界であるが、クルーズ利用者が寄港から日帰りツアーで観光を行うことにより都市景観、都市遺産、港と周辺地域の関係に様々な影響を及ぼしている。グローバル現象であるクルーズ観光は「点」である港からどこまで広がり、面的な影響圏を形成するか。

(2) クルーズ寄港による港、ウォーターフロントと周辺地域の変化の解明（都市研究の視点）クルーズ寄港に対応し、寄港施設と沿岸景観を始め、都市景観がどのように形成、または再構築されるか。その過程でクルーズ利用者、その他の観光者、そして地域住民の港や沿岸域に対するニーズと期待がどのように調整されるか、どのようなステークホールダーが絡むか。

(3) クルーズ寄港が目的地の観光形態に及ぼす影響の検討（観光学の視点）：観光形態はマス・ツーリズムから個人観光へ変わることが観光市場の熟成と見なされてきたが、クルーズ観光の成長をマス・ツーリズムの復活として解釈することもできる。マス・ツーリズムの復活が観光施設と商品の多様化に取り組んできた観光地にどのような影響をもたらすか。

３．研究の方法

本研究は研究代表者のフンク・カロリンと海外研究協力者のハイン・カローラ（TU Delft、オランダ）の協力体制で行った。日本国内では、経済的視点以外からクルーズ観光を取

り上げる研究者が少ないことがその主な原因であるが、地理学、観光学と都市研究の視点を組み合わせるためにもこの体制をとった。
　本研究では計量的方法と質的方法を組み合わせる。
(1)文献と資料調査
　日本語、英語、ドイツ語の文献・資料を収集し、クルーズ観光とマス・ツーリズムに関連する論点を整理した（フンク）。ウォーターフロント開発と観光やレジャーの関連に注目し、都市空間の商品化、観光化の過程に注目した研究をまとめた（フンク、ハイン）。また，文献、報道資料、行政資料、旅行会社の情報などから日本とドイツにおけるクルーズ観光の発展と現状をまとめた。
(2)事例地域の選定
　目的地の都市化、観光化の程度によりクルーズ観光の影響が異なるため、大都市と地方港に分けて、すでにクルーズ観光の重要性が高い事例地域をドイツと日本で設定する。日本では申請者が 2 年間クルーズ観光の分析を重ねてきた広島市、そして申請者も海外研究協力者も以前都市の発展と震災の影響について研究を行った神戸市，そして地方港として境港港を設定した。その他に拠点港としては福岡港，地方港としては鹿児島港、別府港，日南港，北九州港などで調査を行った。ドイツでは、海外研究協力者が長年研究を続けてきたハムブルク市（Hamburg）と、ベルリンまでの影響圏を持ち、年間 150 回以上クルーズ船が立ち寄るバルト海のヴァルネミュンデ港(Warnemünde)を対象とした。
(3)クルーズ乗客のアンケート調査
　博士課程後期の院生を中心に広島港，神戸港，境港港の三ヵ所でクルーズ乗客を対象にアンケート調査を実施し，地域のイメージや実際の行動範囲，訪問経験と満足について把握した。
(4)クルーズ寄港とその影響圏に関連するステークホルダーとその利害関係の分析
　各調査地で聞き取り調査を行った。その対象は都市計画、港管理、観光推進関連の行政機関とホテル、博物館などの観光施設、バス会社などの交通運営会社などの観光産業対象者であった。調査ではクルーズ観光による影響、他観光形態との調整、クルーズ観光に対応した港、都市景観の整備について調べた。
国内聞き取り調査：
国土交通省（2018 年 7 月 20 日,フンク，ハイン）
境港市（2017 年 9 月 21-22 日，フンクと院生 2 名）
神戸市（2017 年 11 月 28-29 日，フンク，ハイン，院生 1 名）
鹿児島県（2018 年 12 月 18 日,フンク），
大分県，別府市と北九州市（2019 年 1 月 8-9 日、フンクと院生 1 名）
宮崎県，日南市（2019 年 2 月 12-13 日，フンク）
ドイツでの聞き取り調査：
ロストック市（ヴァルネミュンデ地区を含む）（2018 年 9 月 4-5 日，フンク，）
ハムブルク市（2019 年 3 月 20-22 日，フンク・ハイン；2019 年 9 月 1-2 日,フンク）
(5)クルーズ観光を分析する枠組みと地域の利益を高める仕組みを検討した。

４．研究成果
(1)クルーズの国際研究の枠組みの検討
代表者フンクが 2017 年 9 月にデルフト工科大学を訪れ，日本におけるクルーズ市場の現状と広島港におけるクルーズの発展と課題について発表し，クルーズ観光の分析枠組みを提案した。それについてハイン教授や他のデルフト工科大学研究者と院生でオランダの研究成果と照りあわしながら討論した。また，研究協力者ハイン・カローラは，Association for the Collaboration between Ports and Cities RETE の学術雑誌である PORTUSPlus で Governance in Port Cities についての特集号を編修し，広島大学総合科学研究科の院生の山本と研究代表者のフンクはそれに論文を提供した。この特集号は港と都市の関係を問うことを目的としている。

(2)日本におけるクルーズ受け入れ地域の現状と課題
①　行政資料や報道資料の分析と各地域に実施した聞き取り調査に基づき，Yamamoto/Funck 2019 において日本クルーズ観光に関する規制緩和を整理し，規制緩和により現地で起こりえる課題や，行政と民間の協力で行うクルーズターミナル開発の課題を明確にした。全国行政が決める入国管理などの規制と，高い自治力により運営されている各港の間の関係が複雑であり，そのガバナンス体制が今後検討する必要がある。
②　各地域に実施した聞き取り調査と資料収集に基づいて，クルーズから利益を得る範囲と業種が異なることを明らかにした。そこには観光資源や施設の分布と特徴，港の運営組織などが影響する。フンクは広島港，神戸港，境港の影響範囲を地図に落とし，その背景について 2018 年 Quebec で行われた世界地理学会で発表した。

(3)ドイツにおけるクルーズ受け入れ地域の現状と課題
ドイツにおけるクルーズ観光の現状とそれを巡る社会的議論に注目し，２ヵ所の事例地域からクルーズ寄港による港、ウォーターフロントと周辺地域への影響を分析し，その結果を日本観光

研究学会全国大会学術論文集に載せた（フンク・ハイン 2019）。二つの港の間にいくつかの違いと共通点が見られた。
第 1 に立地条件であり，河口から離れた HH 港は逆に空港に近い。一方，バルト海の海岸に面している RW 港は陸からのアクセスが悪く，本数の少ない，小さな地方空港しかない。
第 2 にターンアラウンドの割合が異なっている。HH 港に寄港するクルーズのほとんどはその形式で，そのため，クルーズ客による市内観光は前泊や後泊に限られる。RW 港はクルーズの三分の一程度が途中寄港であり，乗客が日帰りツアーを行うが，145 キロ離れたベルリン市がその主な対象で，ツアーによる地域内への経済効果が少ない。両地域の共通点として自家用車で到着し，クルーズに乗り換える客が多く，そのため長期駐車場の整備が不可欠であるが，駐車料金が一つの経済効果を生んでいる。
第 3 に，ターンアラウンド方式は途中寄港よりも経済的な利益をもたらす側面があり，それは港設備と船舶向けサービスが充実している HH 港でのほうが強く表れている。つまり，HH 港から発着する船に提供する食事，燃料，修理などを提供することより雇用効果などが発生するのである。近年，貨物船舶の寄港が減る中で，このクルーズ需要が重要な役割を果たしている。
第 4 に，クルーズ船やクルーズ関連イベントは両地域で市民や観光客にとって魅力的なアトラクションであり，観光の対象となっている。一方，ドイツ語のメディアで見る限り，クルーズに対する批判的な声が多く，特に環境汚染の側面で問題が指摘されている。気候変動への関心が高まる中，このようにクルーズ観光に内在している環境問題とエンタテインメント性の矛盾が今後も強まる見通しである。

(4)日本に上陸するクルーズ乗客のアンケート調査

表 1 の通り，2017 年に広島港で 8 回の調査を実施し合計 379 枚を回収した。また，表 2 の通り 2019 年に広島港，神戸港，境港港で 10 回の調査で合計 508 枚の調査表を回収した。

表 1：クルーズ乗客第①調査（2016/17 年）

日程	調査場所	枚数	船名
2016/10/16	宇品港	51	L’AUSTRAL
2016/10/21	五日市	93	QUANTUM OF THE SEAS
2017/02/27	宇品港	52	NAUTICA
2017/03/10	五日市	35	QUANTUM OF THE SEAS
2017/03/17	宇品港	40	SEVEN SEAS VOYAGER
2017/03/18	五日市	50	Queen Elizabeth
2017/05/28	五日市	37	SAPPHIRE PRINCESS
2017/07/24	五日市	21	MARINER OF THE SEAS

第①調査の一部はこの研究プロジェクト期間前に行ったが，分析は合わせて研究期間中で行い，結果について劉雅茜・フンク・カロリンが 2017 年地理科学学会春期大会で発表した。そこで主に中国人乗客と欧米乗客の出費行動や満足度の違いを説明し，宇品港に入港する中規模の高級クルーズ船に乗っている欧米旅行者のほうが出費が少ないが，満足度が高い傾向を明らかにした。

表 2：クルーズ乗客第②調査

日程	調査場所	枚数	乗客数	船名
2019/03/14	宇品港	39 枚	684 人	NAUTICA
2019/03/22	宇品港	18 枚	212 人	STAR LEGEND
2019/04/30	五日市	54 枚	2092 人	Queen Elizabeth
2019/05/20	五日市	71 枚	2670 人	DIAMOND PRINCESS
2019/09/16	五日市	51 枚	2706 人	DIAMOND PRINCESS
2019/10/19	境港	37 枚	3780 人	コスタ・セレーナ
2019/10/19	境港	26 枚	184 人	ル・ラペルーズ
2019/10/29	神戸	81 枚		SPECTRUM OF THE SEAS
2019/11/05・06	神戸	54 枚		CELEBRITY MILLENNIUM
2019/11/17	境港	76 枚	3247 人	DIAMOND PRINCESS

第②調査は複数の都市，複数の言語（英語，日本語，フランス語，韓国語）で行ったため，準備

と集計に時間がかかり，最終的結果がまだ発表していない。広島港に限って結果を見ると，五日市港の乗客が宇品港より観光、美食を体験する意欲が高いこと，中国からの乗客は自然・景勝地観光，美食，産業観光への期待が高いこと，調査日程により広島に対する満足度に差がある項目は「商業施設の品ぞろい」と「入管・税関手続きの速さ」の 2 項目であることなどが明らかになっているが，第①調査のような明確な差が現れていない。今回の調査で欧米の乗客が主であったことに原因があると思われる。

(5)まとめ

現在，新型コロナバイラスにより，国際観光が完全な停滞状況に落ちいている。その中で，日本で最初にクラスター感染が起こったクルーズ船が狭い空間での大衆観光形態であり，感染危険度が高いことが明らかになった。本研究はクルーズ船地域にもたらす影響が複雑で，地域経済や発展への貢献に限界があることを明らかにし，地域の条件に合わせた港ガバナンスの重要性を指摘した。近年アジアを中心に進んできたクルーズ船の大型化が今後問われる「密」ではない観光のあり方を検討する際，見直される可能性が高い。それはクルーズ観光と受け入れ地域とのマッチング，つまり持続可能なクルーズ観光を再検討するきっかけにもなる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Yamamoto Machiko, Carolin Funck	４．巻 8
２．論文標題 Regulating Cruise Tourism in Japan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 PORTUSPlus	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 フンク・カロリン，ハイン・カローラ	４．巻 34
２．論文標題 ドイツにおけるクルーズ―多様な寄港地，分かれる評価―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 第34回日本観光研究学会全国大会学術論文集	６．最初と最後の頁 CD
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Van Hoang Nguyen, Carolin Funck	４．巻 -
２．論文標題 Tourism’s Contribution to an Equal Income Distribution: Perspectives from Local Enterprises	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Tourism Planning and Development	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1080/21568316.2018.1563564	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Carolin Funck, Nan Chang	４．巻 -
２．論文標題 Island in transition: tourists, volunteers and migrants attracted by an art-based revitalization project in the Seto Inland Sea.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Mueller, D.K., Wiecokowski, M. (ed) Tourism in Transitions. Springer International Publishing.	６．最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-319-64325-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Funck, Carolin	4．巻 20-1
2．論文標題 ‘Cool Japan’ - a hot research topic: tourism geography in Japan	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Tourism Geographies	6．最初と最後の頁 187-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14616688.2017.1402947	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Rie Usui, Xinyu Wei & Carolin Funck	4．巻 -
2．論文標題 The power of social media in regional tourism development: a case study from Okunoshima Island in Hiroshima, Japan.	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Current Issues in Tourism	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13683500.2017.1372393	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Carolin Funck, Yamamoto Machiko
2．発表標題 Cruise tourism in Germany and Japan: conflicts and responsibilities across geographical scales.
3．学会等名 2nd Critical Tourism Studies Asia Pacific Conference（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Funck, Carolin
2．発表標題 The Port, the City and its Hinterland - how Cruise Tourism Transforms Destinations in Japan
3．学会等名 IGU Regional Conference 2018（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Funck, Carolin
２．発表標題 Remote islands between tourism boom, new residents and depopulation: examples from Japan
３．学会等名 International Conference of Sustainable Development of Fishery and Marine Ecological Environment at Penghu（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Funck, Carolin
２．発表標題 Has the island lure reached Japan? Remote islands between tourism boom, new residents and fatal depopulation
３．学会等名 VSJF（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 フンク・カロリン
２．発表標題 中国地方におけるインバウンド・ツーリズムの空間的拡大
３．学会等名 日本地理学会平成29年度春季学術大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 劉　雅茜・フンク・カロリン
２．発表標題 広島県における国際クルーズ観光の現状と課題
３．学会等名 2017年度地理科学春季学術大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ハイン　カローラ (Hein Carola)	デルフト工科大学・教授	